

巻頭言

フジコー技報のさらなる発展を願って！

住友金属工業(株) 社長

中村 爲昭

Tameaki Nakamura



今から42年前の、1953年12月に、当社小倉製鉄所内に富士工業所小倉事業所を開設されたのが(株)フジコーとのお付き合いの始まりである。その後、1968年には和歌山製鉄所内に、1972年には鹿島製鉄所内に事業所を開設され、(株)フジコーとの関係は、益々深まり、今日に至っている。

就中、小倉製鉄所では、チルドロールネックの亀裂修理、鋳型、鍋修理、鋼片疵取り、に始まり高炉、製鋼、圧延、…他各工場の改修工事、据付け工事へと事業を拡大され、最近ではステンレス棒鋼の機械加工や試験作業のような職種までお世話になっている。まさにフジコーさん無しでは鉄鋼生産が成り立たないと云っても過言ではない。

(株)フジコーの発展の流れを、技術面から見ると以下の三つに区分できる。即ち、

- ① 得意技術である肉盛溶接、溶射技術を高度化その装置の開発、設計製作へと“技術の高度化”を図る。
- ② CPCの開発に見られるような“革新的独自技術”の開発を推進。
- ③ ユーザーニーズを的確に、かつ最も早くキャッチ出来る現場に居を構え、ニーズに即応する“現場技術”を基本とする。

と云うことである。

とくに、社会の変化、経済情勢の変化、鉄鋼製造技術の変化に技術開発と経営を巧みにマッチングさせ、あるときは、金と時間をあまり掛けずに“知恵による開発”を、また、あるときは社運を賭けた“革新的技術開発”を推進し、事業を発展させて来

られた経営手腕には、感服するばかりである。

さて、1982年から小倉製鉄所では、サッカーロッドという製品の生産を開始することになり、継手となるカップリングの加工をフジコーさんをお願いすることになった。

自噴しない、または自噴しなくなった油井の地下最深12000フィートにあるポンプの弁を数ヶ月に亘って開閉しつづけ、石油を汲み上げるために使用されるロッドである。地底の温度は300°Fにもなり、かつ、CO₂、H₂S濃度が極めて高いという苛酷な腐食環境にあり、耐腐食疲労、耐磨耗性が要求され、万一保証期間内に破断した場合は高額のクレームとなる。このため、カップリングの表面には、溶射処理が施される。

溶射はフジコーさんのお得意の技術である。にもかかわらず、5名の技術者を山陽工場に派遣され、6ヶ月に及ぶ技術研修を基礎から再度やりなおし、実生産に取組んで頂いたおかげで、カップリングに起因するトラブルは全く発生することはなかった。

正に、経営の基盤に“技術に対する責任と誇り”が確固として存在することを目のあたりにした次第である。

技術の育成の面でも、常に将来を見据えた教育がなされており、例えば、1976年には小倉と仙台の2ヶ所に保全教育センターを開設された。この技術基盤がその後のエンジニアリング事業へ進出する足掛りとなったことは、誰の目にも明らかである。

フジコーさんの発展の経過をゴルフに例えるなら

◎得意なクラブで基本技術を習得！

(鋳型修理、肉盛溶射、…)

◎各種クラブへと応用技術を拡げスコアも向上！

(水プラズマ溶射、自溶性合金溶射、…)

◎やがて、バーディやイーグルも！

(CPC、ハイスロール…)

◎そして今や、押しも押されぬシングルプレイヤー

の仲間入り (総合エンジニアリング)

ということになるろうか。しかも、O.Bを出されぬとは、誠に敬服するばかりである。

さて、日本における製造業の果たす役割の重要性については言うまでもないことであるが、昨今の経済情勢は円高を始めとして製造業にとっては、変化の時間軸を極端に縮めた負の象限の中にあり、これから脱出することは容易なことではないと思われる。

しかし、社会の求める人間尊重、多様性、そして人間を中心とした創造性への対応に、企業活動の理念を置き、高収益を上げ得る独自技術の開発が、今こそ真に切望されている。

米国の経営者達との会話の中でよく云われることの一つに、“金と人材のスカウトが出来ればどんな事業でも成功させられる”ということがある。デジタル思考の多い欧米人の社会にあっては、事実として、一面では正しいと云えよう。

アナログ思考の好きな日本人には、マニュアルやペーパーではなく歴史や企業風土、言い換えれば、人からしか伝承し得ない何かがある。善し悪しは別にして、日本では優良企業と云われる会社にはそれがあり、フジコーさんには、長年のお付き合いの中で、とくに、それを感じている。

“自らの創造開発を基に社会に貢献し、自らの興隆を図る。”という社是の中からその何かがにじみ出て来るのであろう。

この分野では、既に、シングルプレイヤーであるフジコーさんが“一貫責任体制を有する総合エンジニアリング企業”を目指して、益々、御発展されることを願い、技術創出立社として、その技術の中核にフジコー技報が位置付けられ、発展し続けることを念じる次第である。

略 歴 書

なかむら ため あき
中 村 爲 昭

昭和5年2月5日生

出身地 (主たる生育地) 福岡県

【学 歴】

昭和30年3月 京都大学大学院冶金工学専攻修士課程修了

【職 歴】

昭和30年4月 住友金属工業株式会社入社
同 52年7月 小倉製鉄所工程部長
同 53年7月 技術調査役
同 54年4月 小倉製鉄所工程部長
同 56年4月 同 副所長
同 59年6月 取締役就任 小倉製鉄所長委嘱
同 63年6月 常務取締役就任 小倉製鉄所長委嘱
平成元年6月 鹿島製鉄所長並びに米国EGL建設本部長委嘱
同 2年6月 専務取締役就任 鹿島製鉄所長並びに米国EGL建設本部長委嘱
同 3年6月 米国EGL建設本部長解嘱
同 4年6月 社長就任
現在に至る。